

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 キム ジユン  
KIM Jiyoon

本論文は、冷戦体制から脱冷戦体制への移行期にあった 1980 年代の韓国を対象に、その「グローバル想像力」と「グローバルモビリティ」が絡み合う局面として、そのグローバル化（とりわけ人の移動と世界認識）の特質を明らかにすることを目的としている。

第 1 章「序論 (Introduction)」では研究の背景と問題意識を明らかにした上で、「局面 (conjuncture)」、「感情の構造 (structure of feeling)」、「統治性 (governmentality)」、「安全保障化 (securitization)」など、本論文にとって重要な概念が吟味され、人の越境を規制する制度と想像の媒介の 2 つからアプローチする基本枠組みが提示されている。

具体的な分析は、第 2 章から第 5 章で展開されている。

第 2 章「願望と不安：競合する 1980 年代のグローバル想像 (Aspiration and Anxiety: Contesting Global Imaginaries of the 1980s)」では、レジャー空間や学校での教材、メディア・コンテンツなどを素材に、海外旅行が禁じられていた韓国の外国への渴望と不安が混在していた時代状況が活写される。この章は、第 3 章以降のより具体的な事例を理解するための背景描写にあてられているとよい。

第 3 章「グローバルモビリティの出現と制度化 (The Emergence and Institutionalization of Global Mobility)」では、政府が国民を海外に送り出すようになる契機、およびそれによって生み出される力学に焦点が当てられる。権威主義体制のもとで労働力輸出がなされるが、こうした状況にあって人々は自らの世界認識を生み出すようになる。またグローバル想像力の主な担い手が国家から国民個人へと徐々に変容していく一方で、国家が様々な介入をしていく過程が、海外旅行をめぐる制度設計の検討を通じて明らかにされる。

第 4 章「訓練と派遣：海外旅行教育の 2 つの顔 (Discipline and Dispatch: The Dual-face of the Education for Overseas Travels)」では、当時の政府が海外旅行者を対象に行っていた「素養教育」「保安教育」の分析を通じて、そこに潜む統治性の特徴を析出する。当時の状況にあって共産主義勢力は敵とされ、いわば安全保障化の力学の中で、新たな敵と味方をめぐる認識が教化されるが、これは当時の国内政治を反映したものであったという。

第 5 章「脱社会主義社会への国家主義的旅行を通じた脱冷戦的世界市民的主体の塑像 (Molding Post-Cold War Cosmopolitan Subjects through the Nationalistic Tours to Post-socialist Societies (1989-1992))」は、韓国が国交を樹立した旧社会主義国や中国に大学生を送り出す「大学生東欧圏研修」を分析する。政府は、こうした研修を通じて派遣対象となる大学生に社会主義の失敗を理解させ、国家主義的心性を涵養しようとしたが、これは、研修に参加した学生が、自国の優越性を再認識する一方で、社会主義体制に存在する多様な

現実に気づき、新たな世界市民的主体が立ち上がる契機にもなったという、相反する 2 つの結果をもたらすことになったという。

第 6 章「結論 (Conclusion)」では、第 1 章で検討した概念を軸に、第 2 章から第 5 章の知見をまとめ、今後の研究が進むべき方向性を示唆している。

本論文の貢献・価値は、以下の諸点にまとめられる。

第 1 に、従来、経済成長と民主化といった経済、政治の体制変容に焦点を当てた研究が多かった韓国研究にあって、国際関係をめぐる人々の心性を、政府による誘導・干渉と人々の自由意志の闘ぎあいから明らかにしようとしている。

第 2 に、1980 年代の韓国社会のグローバル化の諸相を明らかにする研究が少なく、その多くは冷戦体制が崩壊した 1992 年以降に焦点を当てているのに対して、本研究は、現在の韓国におけるグローバル想像の原型が、移動の解禁によって生じた様々な諸力の交渉によって生まれた点を明確かつ説得的に示している。

第 3 に、M・フーコーの「統治性」、R・ウィリアムズの「感情の構造」、安全保障研究におけるコペンハーゲン学派の「安全保障化」など、それぞれ用いられてきた文脈が異なる概念を、1980 年当時の韓国におけるグローバル想像を記述・説明する道具として使いこなし、上記の交渉過程をうまく説明している。しかも扱うデータも、公文書や各種白書、遊園地やゲーム、映像などの表象、新聞報道や手記、研修参加者を対象にしたインタビュー記録など多岐にわたっている。論文執筆に 10 年の年月が必要とされたのも十分理解できる。

口頭試問の際には、(1) 韓国の現状を説明するための有効性をより主張すべきだ、(2) 国内における中間集団間の違いに焦点を当てるべきだ、(3) グローバル想像がもつ多面性をもっと強調すべきだ、といった要求がなされたが、これも本論文の価値を損なうものではない。

近年の国際関係研究では、国民の感情や感覚を中心的な概念にすべきだとする主張がなされつつあるが、その具体的な提案はさほど行われていない。本研究は、こうした学術的要請にも応えることができる可能性を秘めている。何より、予備審査会の際に指摘された難点を克服し、完成度の高い、よく練られた原稿に仕上がっている。学際研究を掲げる学際情報学府にとって模範となる研究である。

従って本審査委員会は、本論文が博士 (学際情報学) の学位に相当するものと判断する。